しにいく。そのとき、図書館は単なる施設・蔵書群にとどまらない、『はたらき』を持った存在となるだろう。

協力しにいくことのひとつとして、二〇一三年二月には先述の「日本専門家ワークショップ」のシンポジウムに参加し、登壇させていただく予定である。別途機会があればご報告したい。

（国際日本文化研究センター資料課資料利用係長）

出版の現場より

Nichibunken Monograph シリーズ　編集長より

パトリシア・フィスター

モノグラフシリーズの意義

ご存じの方も多いと思いますが、一九九八年にスタートしたNichibunken Monograph シリーズ刊行の目的は、日本語を解さない世界の研究者に向けて、日文研専任教員の研究成果を発信することです。英語を公用語として使用する国が多いので、本シリーズの言語は英語を原則としています。当初から、毎回一〇〇〇部を印刷し、日文研の送付先リストにある国内外の大学や研究機関へ寄贈しています。その一方、海外の出版社と提携すれば、部数がより拡大し配分枠も広がるということで、二〇〇九年に最初のケースとして、山田奨治先生の著作、*Shots in the Dark* を、シカゴ大学出版局と共同で出版しました。このような共同出版を通じて日文研教員の活躍の舞台は一層大きな広がりを見せ、英語圏の学術世界で評価されるまでになっています。本シリーズのうち、鈴木貞美先生の *The Concept of "Literature" in Japan*（二〇一〇年）や、磯前順一先生の *Japanese Mythology*（二〇〇六年）などは、海外の大学の教科書として使われていると聞いています。

国際的な学問の世界において、モノグラフ（単著）は、シンポジウムの発表や報告書以上に永続的価値を持つと思われます。本シリーズの最初の五冊はソフトカバーでしたが、さらに価値を高める狙いもあり、数年前からはハードカバーへと移行しました。実は、ある年の原稿募集の際に何人かの先生たちから、「ペーパーバック形式の今のデザインではインパクトが弱く、部数も少なすぎるので、自分の研究成果を英語にする場合は、海外の出版社に直接依頼する」と、言われたのがきっかけです。編集長としてはこの時、もっと魅力的

なモノグラフシリーズにしようと決意しました。

海外出版社との共同出版

所内制作する出版物は、海外でよく“vanity”出版物と呼ばれるとおり、自画自賛のお飾りの出版物と見られがちです。残念ながら、研究成果としてはあまり認められていません。このような批難を避けるためにも、海外出版社と共同で出版するのは一つの方法です。アメリカやヨーロッパの出版社では、届いた原稿をまず査読者（二〜三人）へ送り、その結果を編集委員会で検討します。もちろん委員会では、学問的な重要性だけではなく、市場競争力のある本かどうかについても熟慮します。評価がよければ、最終的に著者と契約交渉へ入るわけです。このような厳しい検査（vetting）を経た原稿のみが出版されています。非常に競争率の高いプロセスであり、海外出版社との共同出版は並大抵のことではないことがわかります。

Nichibunken Monograph シリーズにおける共同出版の実績としては、米国シカゴ大学出版局（University of Chicago Press）と英国 Equinox Publishing の二社があり、今後も、英国の Routledge・オランダの Brill・米国の Lexington Books 等の各出版社と契約を結ぶ予定です。海外と日本の契約形態が違うため、日文研の出版編集室（白石さん）や総務の方々も交渉手続きに苦労しています。しかし、多少の手間はかかっても、今後もできるだけ海外の出版社との共同出版を進めていただき、モノグラフシリーズを世界へ広く普及させていければと願っています。

翻訳より変形（transformation）

これまでに刊行された Nichibunken Monograph シリーズのうち、最初から英語で書かれていた原稿は二冊しかなく、ほとんどが日本語でした。和文を完璧な英文に仕上げる過程での苦労や困難についてはあまり知られていないので、ここでいくつかの問題点を取り上げます。

まず、本シリーズではいずれも、単に和文に忠実に翻訳するのではなく、英語圏の読者（専門家を含める）がよりよく理解・認識できるように、原文の改訂を行っています。ご存じのとおり、モノグラフシリーズに採択された本のほとんどは日本人向きであり、日本の歴史などの知識をあらかじめ有する読者を対象としています。ですから、それを英文にする場合は言うまでもなく、英語圏の読者が理解できるように詳

細な説明を加える必要があります。一方、うまく翻訳できない表現も必ず出てきます。山田奨治先生の原書『禅という名の日本丸』というタイトルを例に挙げると、日本人はその意味やニュアンスを理解できますが、英語に直訳すると、英語圏の読者はその内容を想像することすらできません。私たちはシカゴ大学出版局と共にいろいろな英語タイトルを考えた末、本書の主旨を伝えるため、*Shots in the Dark: Japan, Zen, and the West* としました。元の日本語のタイトルとは全然違います。

また、モノグラフシリーズの多くは、日本語の資料を使って書かれていますが、時折、外国語文献の引用（和訳）が見られます。その場合、英語にする時は、和文からの英訳よりも原語テキストを直接引用することが望まれます。さらに、英語圏の読者はそのトピックに関連する他の英文出版物を知っている可能性が高いので、著者自身が自分の専門分野に関する英語圏の出版物をある程度知っている方がよいと思います。場合によっては、参考文献リストに代表的な英語文献も入れるべきです。同じ分野の英語文献を無視すると、後々批難される可能性が高まります。

著者・訳者・編集者の協同作業

各原稿によって状況は違いますが、英訳する過程で、本文の大がかりな再構成・改造（restructuring/reorganizing）が必要になる場合もあります。実は、日本の読者は本の構成や文章のスタイルについてはあまり批判的ではないので、著者自身もあまり気にしない傾向にあります。日本では一般に、早く原稿が書かれ、脚注は少なく、軽く編集され、出版されているように見受けられます。他方、英語圏の研究者は、本や論文を厳しく批判します。回りくどい文章や訳のわからない言葉（jargon）、冗語などには耐えられません。ですから、研究成果の評価を高めようと思うなら、英語圏の学術標準に達するまで書き直さなければなりません。つまり、編集とは、単に原稿を整理することではなく、水準を高めるための仕事なのです。

また、翻訳者の選択も要件の一つです。その本で扱う時代や当該分野の専門用語、さらに、英語圏の学術水準などに詳しい翻訳者の人選が必須です。時には、専門分野を同じくする研究者に依頼することもあります。例えば、鈴木貞美先生の本は、日本文学専門家の Royall Tyler 先生が英訳してくださいました。良い翻訳者は、同時に良い執筆家でもなければ

ならない。Tyler 先生はまさにそうでした。しかし、日本語が上手である立派な研究者が必ずしも良い翻訳者というわけではありません。Nichibunken Monograph シリーズを長年編集してきて、現在の感想としては、専門の研究者よりもむしろ優秀なプロフェッショナル翻訳者が望ましいと考えています。

モノグラフシリーズは、単なる英訳本ではありません。著者は、和文から英文への変化プロセスの各段階において、訳者と編集者と緊密に作業を行わなければなりません。英訳ドラフトを丁寧に読んだり、訳者がふさわしい言葉を選択できるように和文のニュアンスを説明したりする必要があります。また、著者自身が自分のテキストを、英語圏の読者のようなフレッシュな目で検証することも必要です。本来は、英訳に入る前に原稿を書き直した方が良いものになるでしょう。翻訳者と編集者に任せておけば、魔法のように立派なモノグラフが出来上がるなどというのは無理なことです。また、英語圏の学術書のほとんどは索引付きのため、モノグラフシリーズにも索引が望まれます。索引作成のためにも、著者の知識や協力が必要です。

このような事情によって、Nichibunken Monograph シリーズは、他の日文研の出版物に比べると、刊行までに時間がかかります。共同出版相手を探したり、交渉したりするのにも時間がかかります。良い英訳として成長するには時間が必要で、著者・翻訳者・編集者の間を行きつ戻りつしながら、新しい本は生まれます。大変な手間ではありますが、その結果、自分の研究成果が世界へ広がり、未知の研究者や学生とつながり、海外へ行かずとも自ずから海外交流が行われるのです。一流の英訳のおかげで、日文研の評価も一層高まるのではないかと思われます。それを、私は目指しています。

（国際日本文化研究センター教授）

ネットワーク形成の現場より

旧ユーゴスラヴィアの日本研究

細川周平

八月末から九月初頭にかけて、旧ユーゴスラヴィアのベオグラードとザグレブを旅してきた。今はセルビアとクロアチアの首都である。分離・独立して二〇年ほどたつのに「旧